

| | |
|----------|--|
| 氏名 | 岡本 晋 |
| 学位(専攻分野) | 博士(学術) |
| 学位記番号 | 博 1 2 1 8 号 |
| 学位授与の日付 | 令和 8 年 3 月 23 日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第 4 条第 1 項該当 |
| 研究科・専攻 | 工芸科学研究科 デザイン学専攻 |
| 学位論文題目 | 地域政策のための適応的デザイン—地方自治体の直面する不 確実性に応答するデザインアプローチの探求 |
| 審査委員 | (主査) 教授 水野 大二郎 准教授 水内 智英 教授 清水 重敦 准教授 津田 和俊 |

論文内容の要旨

本論文は、不確実性の高い時代において地域政策を適応的にデザインするためのアプローチを探求する。日本国内の地方自治体が直面する想定外事象に着目した事例研究とその分析をもとに、不確実性を伴う地域政策のための「適応的デザイン」の理論的枠組みを整理し、その実践可能性を検討した。

序章では、デザイン学の研究分野である政策のためのデザイン (Design for Policy) の議論をもとに研究の背景と目的を述べ、本研究における対象の整理や用語の定義を行った。第 2 章では、はじめに公共政策学・行政学とデザイン学における「政策デザイン」の系譜を整理し、伝統的な政策デザインから 2000 年代以降の PSI ラボによるデザイン思考の導入、2020 年代の分野横断的議論まで、両分野による交錯の歴史的展開を明らかにした。その上で、参加レベルと政策サイクルの二軸から既存のデザイン実践を分析し、デザイン研究が拡大しうる領域を特定した。さらに、ガバナンス研究、公共政策研究、デザイン学における不確実性への対処を目指したアプローチを整理し、適応性の重要性を指摘した。

第 3 章および第 4 章では、想定外事象発生時における適応的デザインのアプローチについて事例研究を通して検討した。第 3 章の滋賀県日野町における新型コロナワクチン集団接種サービスの調査では、関係者への日記調査とインタビューを通じて、コロナ禍におけるサービスブループリンティングの過程を追跡した。その結果、想定外事象発生時における 5 つの行動カテゴリーを特定し、サービスブループリンティングの 3 つの課題として「サービス設計者の失敗への恐怖」「関係者間の共通理解の欠如」「組織経験の不足に基づく個人への依存」を導出した。

第 4 章の山梨縣市川三郷町で行われたプロジェクト「ワカモノ議会」の調査では、財政的不安が地域社会に広がる状況下で進められた市民主導の参加型アジェンダ設定プロセスに筆者自身がデザイナーとして関与し、政策サイクルが始まる直前の段階における関係性の変容過程を追跡した。その結果、「関係性のインフラストラクチャリング」という政策のための参加型デザインの新たな可能性を導出し、「見過ごされてきたステークホルダーとの継続的関係の構築」「闘争の適切な位

置づけと多方向的な建設的議論の促進」「過去と未来の間の参加を拡張するモノ (Things) のデザイン」というデザインに要求される役割を明らかにした。

第5章では、事例研究から得られた知見を統合し、適応的デザインの理論的枠組みを提示した。政策サイクルと参加レベルの二軸によるマッピングから、**Iterating** (繰り返す)、**Expanding** (拡大する)、**Infrastructuring** (関係を築く)、**Speculating** (思索する) という四つの行動モデルを特定した。同時に、これらを統合する二つのデザイン態度として、不確実性の減少を目指す「規律的態度」と、新たな不確実性の探索を志向する「生成的態度」を提示した。さらに、二つの事例の時間的制約の違いに着目し、緊急対応型と長期システム変容型の二つの適応アプローチを総合行政体制である地方自治体のなかで循環させるダイナミクスが重要であると提示した。最後に、地域政策にまつわる個人、組織、ガバナンスといった複数のレベルにおいて適応的デザインの導入可能性と障壁を考察した。

本研究は、欧州中心に発展してきた政策のためのデザイン研究に対し、日本の小規模基礎自治体の文脈から新たな知見を提供するとともに、政策サイクル全体を射程に入れた適応的デザインの枠組みを構築した。これにより、デザインがアジェンダ設定から評価まで政策サイクル全体に統合され、さらに自治体組織や地域ガバナンスのより深いレベルに浸透する可能性を示した。今後の研究課題として、より多様な政策領域や自治体規模における事例研究の蓄積、適応的デザインの長期的効果の検証、個人・組織・ガバナンスの三層における導入条件のさらなる精緻化が挙げられた。また、公共政策学やガバナンス研究との学際的対話を深めることで、繰り返される想定外の事象に対処するための適応的デザインの実践と理論の発展が期待される。補論では、「祖先と共在するデザイン」と題して、本論における「参加」の時間的範囲を問い直す探索的研究を行った。京都市上賀茂地区の事例から示された参加の時間的拡張の手法と洞察は本論の射程を超えるが、多元的世界観を前提とした今後のデザイン研究に新たな視座を提供した。なお、本論文のうち以下の3つの章は申請者を筆頭著者とした国際論文から構成されている。

第3章は以下の論文に基づく。

How can we adapt Service Blueprint for future crises? Lessons learned from government services under COVID-19

Shin Okamoto, Daijiro Mizuno

ServDes.2023 Entanglements & Flows Conference: Service Encounters and Meanings Proceedings, pp. 1672-1691, 2023

第4章は以下の論文に基づく。

Design when Policy Cycle Begins: Participatory Design as Relational Infrastructuring for Local Policy

Shin Okamoto, Daijiro Mizuno

Proceedings of International Association of Societies of Design Research Conference 2025: Design Next, Accepted for publication (in print, ページ数 : 17)

補論は以下の論文に基づく。

Coexisting with Ancestors – Elongating Participation between “Pasts” and “Futures”

Shin Okamoto, Daijiro Mizuno

Proceedings of the Participatory Design Conference 2024: Exploratory Papers and Workshops
- Volume 2 (2), pp. 114-121, 2024

論文審査の結果の要旨

岡本晋による博士学位請求論文「地域政策のための適応的デザイン」は、不確実性の高まりの中で地方自治体の政策形成を支えるデザインアプローチを理論・実践の両面から検討したものである。申請者は筆頭著者としてデザイン学における主要国際カンファレンスにおいて査読付き Full Paper 2 本 (ServDes.2023、ベストペーパー賞受賞の IASDR 2025) および査読付き Paper 1 本 (PDC 2024)、受賞作品 1 点 (グッドデザイン賞 2025) を発表しており、博士後期課程修了要件を充足している。本論の独自性は滋賀県日野町および山梨県市川三郷町の事例分析を通じた実証的なデザインアプローチを提示した点にある。そのアプローチは四つの行動モデルとして理論化され、国際的な政策デザイン研究に貢献するものと認められることから、審査員全員が一致して博士 (学術) に相応しいと判断した。